

やまなし
月見里農業紀行

あさほせ
朝穂堰



朝穂堰とは

朝穂堰は甲斐三堰の1つに挙げられており、釜無川支流、北杜市須玉町江草地内塩川左岸から取水し須玉町、明野町を経て韮崎市穂坂町に至る約25kmの用水路になります。

浅尾堰と穂坂堰の始まり

この堰は今から約400年前の寛永9年（1632年）に立案され、上神取村の百姓であった重右衛門と清右衛門が代表となって工事を起こし、徳川家光時代の甲府代官平岡治朗右衛門に堰の開削の願いを出しました。水路の測量が行われた後、開削の許可が下りたのは8年後の寛永16年（1639年）でした。工事着手から4年目の寛永19年（1642年）に、浅尾村を貫き同村栃沢までの11.7kmを開削し、浅尾堰と呼ばれました。さらに、寛文10年（1670年）には小笠原村まで延長しました。

その後、享保元年（1716年）に大干ばつがあり、三之蔵、宮久保、三ツ沢の3村は水が涸れ住民は大いに窮迫しました。領主松平甲斐守は、享保3年（1718年）に楯無堰の整備に手腕を振った六郎衛門に命じて3年をかけ穂坂堰を完成させました。こうして浅尾堰は、穂坂堰も加えた計40kmもの用水路になりました。

そして朝穂堰へ

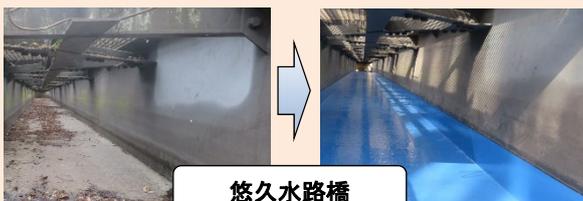
明治5年（1672年）には浅尾堰と穂坂堰を合わせて朝穂堰と呼ばれるようになりました。この水路の完成により、朝穂堰は豊かな水を湛え茅ヶ岳山麓の水に恵まれない地域に恩恵を与え、水稻が展開され

県営土地改良事業による改修工事

県営土地改良事業により、老朽した朝穂堰のさまざまな設備が今も改修されています。



水路



悠久水路橋



漆戸水路トンネル

朝穂堰のこれから

古い歴史を持つ朝穂堰は、事業により新しい用水路に生まれ変わり、地域の農業振興とあわせて、住みよいふるさとづくりの重要な役割を果たすものになっています。

さらに平成24年（2012年）には、再び各施設の老朽化が進んできたため、県営土地改良事業により水路の長寿命化を図るための更新整備を始め、現在も改修工事を実施しています。

甲斐三堰とは

山梨県には農業用に作られ、地域で守られてきた数多くの堰（水路）があり、その中でも規模が大きく、代表的な堰は「甲斐三堰」と呼ばれています。

今回紹介する「朝穂堰」の他に、「徳島堰」と「楯無堰」が甲斐三堰になり、三堰の長さを合わせると約60kmにもなります。



